琉球大学学術リポジトリ

ボリビア駐日大使講演記録

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: マサカツ・ハイメ・アシミネ・オオシロ
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010136

<報告・記録1>

ボリビア駐日大使講演記録

講　師：ボリビア共和国駐日全権特命大使
　　マサカツ・ハイメ・アシミネ・オオシロ
テーマ：南米における政治経済と沖縄移住地
日　時：2008年7月28日(月)　13:30～14:40
場　所：琉球大学法文学部　新棟114教室
主　催：琉球大学移民研究センター
後　援：在沖縄ボリビア共和国名誉領事館　沖縄ボリビア協会

みなさん，こんにちは。本日は，この名誉ある琉球大学で講演することを大変光栄に思っており，関係者に心よりお礼を申し上げたいと思います。2つの国，国民について考える機会を与えてもらったことにも感射します。イギリスの歴史家アーノルド・トインビーの言葉をお借りしますと，「人間は自分の体験に基づいて他人に何かを伝えることができる」と言っていますが，私が今日ここにいるのもそのためだと思います。本日は，7つのテーマを，私の体験も含めてお話ししたいと思います。

テーマ1：ボリビアへの日本人移民

ボリビアへの日本人移民というのが1番目のテーマですが，はじめて日本人が南米に到着したとされているのは，1607年から1612年頃にペルーのカジャオ港です。フィリピンを拠点にしていたスペインのガレオン船(大型帆船)によってメキシコのアカプルコからやってきたということなのです。

我が国ボリビアへの移民はこのペルーへの移民と密接な関係にあります。1899年2月27日に横浜港から発った「さくら丸」が790人の日本人を乗せてペルーへ向うのですが，到着後様々なトラブルによって一部は帰国し，他は奥アマゾンと呼ばれるボリビア内陸のジャングルに移住するのです。

テーマ2：2国間関係(外交関係)

2番目のテーマに移ります。これは，2国間関係がいつから始まったのかということです。1908年頃には我が外務省が日本との国交を試みますが実現せず，通商条約を締結したのは1914年のことです。その際全権大使のスペルティノ・アルテアガとEiki Hioki Jushu大使の下で実現しています。

テーマ3：ボリビア移民政策と日本人移住地「コロニア」

3番目の項目に入りますが，これはボリビアへの日本人移民とその移住地「コロニア」についてです。ボリビアには2つの移住地が存在し，ひとつは沖縄県出身者によるもので，もうひとつは本土出身のものです。本土出身のグループはヤパンカニ川周辺に居住するようになったのですが，当初はこのグループのリーダー西川利道にちなんで西川計画移民団と呼ばれ，地域の砂糖生産をしていました。

それから1948年にはリベラルタ(ベニ県)では沖縄県出身者で協会を組織し，沖縄県戦災救援会というのが設置されます。支援が必要な県民たちに金銭的に支援するだけではなく，後にうるま農業組合というものに発展し，沖縄県からの移民受け入れをボリビア政府に働きかけるのです。この組合は1950年9月12日にサンタクルス市の公証人役場で法人登録をするのです。

こうした動きとほぼ同時期に，沖縄駐留軍はアメリカのスタンフォード大学のジェームス・ティグナー(James Tigner)教授に，沖縄県民がこの中南米諸国で受け入れられるかどうか検討するよう調査を依頼するのです。1952年には計画案が提出されますが，それには10年間でポリビアに12,000人の県民を移住させるという案がでてくるわけです。沖縄では米政府が戦後人口増や基地拡張等という理由で海外に移民させるという計画を立てたのです。

一方，ボリビアは戦前ですが，チャコ戦争というパラグアイとの領土戦争をするのです(1928年～1935年，パラグアイ川西方のチャコ地方の帰属をめぐって戦争になり，パラグアイに敗れる)。その後，アマゾン地区の東側を国防・拓殖省によって人口を増やす計画を実施するのです。1937年頃に，ベニやサンタクルス出身の帰還兵をヤパンカニ(Yapancani)やグレデル(Grether)に移住させるのです。国内の人口配置を実施しますが，1954年の農産物輸入代替措置を目指して国内生産を増産するためなのです。こうした環境の中，1953年6月18日の行政府命令によってボリビア政府は沖縄県民の移住としての受け入れを実施するのです。

ここからは自分の両親の歴史とも関わってきますが，1年後の1954年6月19日には269名の第1陣(沖縄県民)がボリビアに到着し，その中にはまだ独身だった私の父がいたのです。第2陣は，数ヶ月後パロメティージャスという地区に到着しますが，そこには後に私の母になる女性がいたのです。合計400人の移民団，移住者がこのボリビアに到着するのです。

当初はリオグランデ川付近の「うるま地区」というところにいたのですが，父の話によりますと，それは言葉に表せないぐらい悲惨な体験です。伝染病によって多数が死亡，父は幸いにも生き残りの一人でした。あまり詳しくは話してくれませんでしたが，多分記憶から遠ざけたのでしょう。また，地元先住民も当初はあまり友好的ではありませんでしたが，

徐々に関係も良くなっていったのです。その後，サンタクルスから 100km 北部に移動し，パラメティージャス川の近くで第 2 陣と合流するのです。ただ，問題は面積や装備が少なくてみんなを受け入れることができず，そこから更に 60km 離れた場所に移動せざるを得なかったのです。これが現在の位置に当ります。

数ヶ月後，先ほどお話しました伝染病のことですが，その原因解明のためアメリカから医師団が来ましたが，突き止めることができませんでした。後の研究で，ハンタ・ヴィルス hantavirus(ネズミによって感染)であることが解ったのです。

1954 年から 1977 年の間，ボリビアには 710 世帯，3,344 人の沖縄県民が移住してきたのです。また，在ラパス日本大使館及びサンタクルス JICA 事務所によりますと，1979 年にはこうしたコロニアの人口は 1,400 人だとされています。ということは，かなりの者が別の場所に移転したということなのです。理由は様々のようですが，80 年代に入ってからは日本の著しい経済成長によって多くの者が本国に戻っています。これが後から「デカセギ現象」に表れてくるのだと思われます。

テーマ 4：日系人社会の特徴

4 番目のテーマに入りますが，日系人社会の特徴についてです。ボリビア移民研究の第一人者である若槻先生や国本先生の研究によりますと，これはスペイン話でも中央大学出版が出している「La Inmigracion Japonesa en Bolivia」というタイトルですが，ボリビアの日系コロニアの特徴等が書かれており一部抜粋させていただきます。

・コロニアの農業生産の維持とその発展を目指すこと。
・次男と三男をボリビア社会に完全に適用(同化)させる教育をすること。
・日本人一世から継承された日本の文化的ルーツを維持しながらも，地元社会とも紛争や対立を起こさず社会に適用すること。

コロニアを後にした日系人であっても，中には大きな功績を今も残しています。都市部に行った人が多いのですが，例えば EI Samurai de la Revolucion というタイトルの本には，チェゲバラと共に戦い命を落とした日系人兵士フレディー前村(Freddy MAEMURA)，詩人・作家であるペドロ下瀬(Pedro SHIMOSE)，国会議員で大統領候補でもあった現職のミチアキ永谷(Michiaki NAGATANI，先の大統領選でモラレス候補に負けたのですが，国政で今も活躍中)，サンファン市市長のカツミ伴井(Katsumi BANI)，同じ市長のタイラ氏，画家・彫刻家のティト倉元さんらが載っています。

さきほど申しました両専門家の見解を引用しますと，日系人のライフスタイルの特徴は次のとおりです。

・日系人たちの同胞組織のメンバーは日系人としての意識が強く，ボリビア国内では大きな付加価値になっていることです。

・日系人たちの経済・社会状況は良く，教育水準も高く，地元社会平均水準よりは高いと言えます。
・日本への関心も高く，日本語を学習する意思とそれを子孫にも継承させています。文化的にもそうであり，移住地では運動会，盆踊り，カラオケ大会などが行なわれています。

日本への関心は日本人の子孫ということに起因するだけではなく，日系人たちの親や祖父母への敬意や愛情の証しでもあるのです。

とはいえ，日系人は地元社会に統合(社会の一員として活動)されており，日本との絆というのは精神的と言うか，気持ちの上でのつながりなのです。

テーマ5：私の移民としてのエピソード

今度は，私のこれまでのエピソードをいくつか紹介したいと思います。実は，サンタクルス在住の叔父から聞いた話なのですが，母は自分の着物等を処分し，又は再利用して私のためのオムツや衣類をつくってくれたそうです。

これも母から聞いた話しですが，私が産まれてまだ数ヶ月後のある日，床の間のような少し高くなった床の上で寝ていた時に，セペスという蟻の大群がやってきたのです。しかし私は蚊帳の中にいて，母にはどうにも助けられない状態にありましたが，蟻たちは蚊帳の中まで入れなかったため助かったのです(この蟻は巣から巣へ移動する際非常に凶暴で全てを破壊するのです。動物であっても動かなければあっという間に骨にしてしまう凶暴な蟻なのです)。それで助かり，ここにいることができるのです。

幼稚園に入った時は，スペイン語はまったく理解できませんでした。家庭では日本語しか使っていなかったからです。両親もスペイン語はあまり理解できなかったと思います。コロニア「オキナワ」には私が5歳だった頃まで過ごしました。1964年の大洪水で都市部へ移転することになったのです。今もこうした大洪水が時々発生しています。

言葉が出来ないため，町へ移った頃はコミュニケーションが取れず，学生時代はよく喧嘩もしました。社会に適応するため，スペイン語を一生懸命勉強したのですが，今度は逆に親が教えてくれた日本語を忘れてしまったのです。

大学時代には農民団体や労働組合，社会運動と接触し活動するようになり，学生委員として様々な委員会(福祉，スポーツ事業)にも参加するようになったのです。そして，1980年の軍政権下の弾圧では，政府の非正規武装組織「パラミリタル」(民兵)に捕われ，拷問を受けたのです。

そして，エボ・モラレス政権が発足し，大統領自ら，社会運動に参加していた私をこの新しいプロセスに参加するよう求められ，キャリア外交官(職業外交官)でない私に，駐日大使として任命するのです。

テーマ6：考察したいテーマ

6番目のテーマですが，日本での外交官としてではなく，日系人としての気持ち(私一人の人間として，住民として)についてです。まだ，日本での赴任期間は短いのですが，経験から得た文化的な違いというものは日本でも，ボリビアでも感じており，その違いを共有することはかなり困難だと実感しています。特に今の日本の移民政策というものがこの違いを強調させてしまっているのかもしれません。また，多くの日系人2世たちがこう思っており，もう長くこの日本に住んでいる私の弟もそう話しています。

もうひとつは，日系社会とも関わりがある，コカの葉について触れたいと思います。ボリビア政府としても，1961年の国連麻薬協定のリスト1から除外することに務めています。そのため，コカインではなくコカの葉は再評価すべきであり，そのための戦略を我が政府は立てており，葉は麻薬ではなく，その自然状態での消費は健康に害を及ぼさないということを理解してもらいたいのです。

テーマ7：現政権の新しい政治

7番目のテーマは，現政権の新しい政治というものです。モラレス政権から私が任命され日本に送られたのは諸外国にボリビアの理念を伝えるためです。この21世紀は大きな変化と危機によってスタートしました。資本主義の資本蓄積というのは地球そのものの存続に相反しています。人類全てに欧米型の今の消費パターンを維持するということは資源の限りからみましても我々がみる限り不可能です。足りませんし，消費している量は補填されていないのです。生産に必要な土地及び水の生態系は世界では年間1人当たりに対して平均面積が2.23haなのですが，今の1人当たりの消費で計算しますと1年3ヶ月の生産が必要なのです。もし，これがヨーロッパの消費量水準ですと，4.8haですので，この同じ量を地球上全ての人が消費すれば地球が2つ必要になります。アメリカ人の消費量で比較しますと，1人当たり9.6haです。みんなにこの消費量を与えるのであれば地球4個分が必要になります。

今の世界経済の成長は貧困の削減になっていません。逆に格差は拡大しており，環境が破壊されているのです。OECDの調査によりますと，この破壊は消費が拡大することによって深刻になっています。エネルギー危機，食糧危機，そして気候変動による危機はこうしたアンバランスの表れです。

独裁革命は世界の中で起きている変化ともちろん深く関係しているのです。独裁と軍事支配があれば，地域のみでなく国を破壊することはできますが，国のやり方を押し付けてやらせることはできません。いくら強い者でも弱い者を完全に従わせることができない時代なのです。無理な計画は破壊と対立，危機しか生み出しません。

世界の変化は始まったばかりです。みんなで創る変化です。大変困難な矛盾した状況の

中新たなバランスを探していかなければなりません。ボリビアもこうした変化の中にあります。対外政策は国内のこうした変化を伝えるための手段でもありますが，世界にもその変化を促すためです。現在，ボリビアが行なっている民主的文化的革命は世界の中で起きている変化ともちろん深く関係しているのです。

我々は，もっと公平で，多様で，排除しない自然環境とバランスの取れた世界を求めているのです。みんなが VIVIR BIEN，直訳するとゆとりのある生活，物質的にも良い生活という意味ですが，すなわち人間らしく，周囲と調和のとれた生き方が出来る世界を目指しています。これは，他人より良い生活をするのではなく，みんながより良い生活ができるようになってほしいという意味です。

補完し合って，競争するのではないのです。他人や隣人をないがしろにせず，指標上の「1 人当たりの所得」だけで「良い生活」をするのではなく，やはり文化的アイデンティティーやコミュニティーの特徴，互いの調和，そして「母なる大地―パチャママ(聖なる自然)」とも調和しなければなりません。

こうした概念，哲学に基づいて，

1) 国と国の関係も人民と人民の関係であることです。
2) 主権の行使はダイナミックなプロセスとして行なうことです。
3) 文化的多様性を認め，先住民たちのアイデンティティーを復活させること。
4) 自然との調和を唯一の選択として認めること。
5) 非対称的のことを縮小すること。格差というものが最も大きな不正義であり，これが紛争や地球の破壊を招くということを自覚すること。外交というのは誠実であり，国民・人民も当事者であり，主権の行使はその象徴であること。
6) 貿易も連帯的でなければならず，補完し合うためであり，代用するためではない。また，国内産業を潰すためでもない。市場開拓という目的に尽きるのではなく，国々が補完し合うということである。貿易と投資というものは重要なものですが，でもこの地球上のすべてを支配するためであってはならないのです。だからこそ，これまでの国際機関による協定や条約等はすべて見直す必要があるのだと我々は訴えているのです。

だからこそ，我々が，この日本とボリビアという 2 つの文化，2 つの民族，2 つの国家の架橋になれるのではないかと思います。そして，この地球の将来のために多くのものを提供できると確信しています。